公民館報

おがわ

小川村ふるさと通信

No. 231
（2023 年夏号）

あざみの花に誘われたのは私だけではないようです　（写真　松本博充）

- 小川村の神社③
- ここに生まれた
- 小川に生きる
- 歴史探索　－農耕馬－
- 文化協会
- 図書室だより
- 新旧館長挨拶　社会教育・公民館関係役員
- 路端の小さな命③

小川村の神社③

成就（じょうじゅう）神社

4月29日、コロナの制限緩和により4年ぶりに成就地区にある成就神社の春祭りが地元の方をはじめ、移住の方及び昨年生まれた赤ちゃんまでが参加し、執り行われました。

この神社の起源は古いといわれているそうで、当時の詳細を知る古文書等が無いとのことで、総代長の松本芳人さんに伺いました。

起源は分からないものの、神社の宝物とされている御神像の形見に「延宝二（甲寅）年三月京より下る白髯明神」と記されていることから今から349年前の1674年4月にこの地に建立されていたと考えられます。当時は「白髭神社」と称されていたそうです。京周辺（現在の京都市）での関連を調べて見たところ、近江国（滋賀県）の琵琶湖西岸に面した神社が全国にある総社として有名であることから、そこから勧請したのではないかと考えられています。近隣では、長野市鬼無里日影にも白髭神社があります。何か共通点があるかもしれないとのことです。

神楽を曳く

この祭神は、猿田彦命（さるたひこのみこと）で、延命長寿・長生きの神様として、開運招福・学業成就・人の営みごと、業ごとす

移転前に社殿があったと思われる宮の平地籍（成就下村）

神社での式典

べての導きの神として祀っているとのことです。当時の社殿所在地は、現在の下村の宮の平地籍にあったとされ、弘化４（１８４７）年の大震災により現在の四久保地籍に移転されたといわれています。

明治13（１８８０）年に、「大宮神社」と改称。明治39（１９０６）年に、明治政府は日露戦争後、戦後経営とからんで維持困難な弱小の神社・寺院を合併整理の発令。翌40年発令に基づき長野県から村内の小規模の神社は合併、あるいは境内を移転し適正な規模とし、神社永遠の維持方法を確立するよう勧誘の指示のもと、明治41（１９０８）年12月に成就地区内にある秋葉社・十二社・浅間社・神明社の四社を併合します。昭和19（１９４４）年9月に村社昇格許可発令を受けたものの翌年の昭和20年に敗戦、ＧＨＱの統治下で社格を失い、現在は神社庁の管理下に位置づけられています。昭和39年に若連が解散し、獅子宮奉納が途絶えたものの、10年後の昭和49年に若連結成し獅子宮奉納の再復活。昭和から平成に年号が変わると共に「成就神社」に改名し、新潟県柏崎市高柳町門出神社と姉妹提携し現在に至るとのことです。

二度の改名が地域の活気を導き、赤ちゃんからお年寄り、移住の方が一緒になり協力することができました。

（「成就神社」パンフレット、むしくら風土記虫倉神社と廣福寺より）

合祀前の状況

分祀名	祭神名	旧所在地
秋葉社	水像女命・埴安命	石上地籍
十二社	国常立尊	下村地籍
浅間社	木花咲耶姫命	
神明社	天照大御神	中村地籍

道祖神での獅子舞

ここに生まれた

母になり感じること

北山　陽香さん（高府上町）

我が家に昨年12月21日第3子となる男の子が誕生しました。体重4キロ弱、兄弟の中で一番大きな子でした。名前は雄大（ゆうだい）、男らしく包み込んでくれるような人になってほしい、大きな広い心を持った人になってほしい、そんな願いを込め名前をつけました。

出産前日の夜8時頃、お風呂を出た途端に破水、すぐ産院へ行きそのまま入院となりそれから4時間程で元気な産声をあげてくれました。第1子、第2子とも陣痛促進剤を使った出産だったため、今回初めて自然陣痛での出産でした。過去2回の出産は何十時間も陣痛に苦しんだため、正直なところ感動するよりやっと終わった、疲れた、早く休みたいという想いが強かったのに対し、今回はスピード出産で体力に余裕があったのか?はたまた3人目で心に余裕があったのか?元気に生まれてくれてよかったと感動しながら出産後に産院からいただけるアイスをペロリと平らげ、夫や助産師さんと笑いながら話をしたりする余裕さえありました。

そんな出産後すぐのエピソード

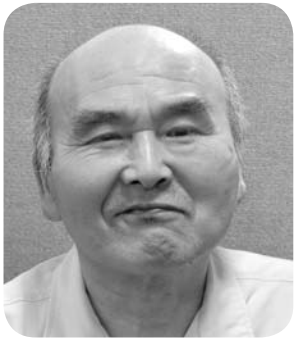
出生時の記録を母子手帳に記入する際「誕生日どっちにする？」と助産師さんに聞かれました。頭の中はハテナだらけ。聞いてみると「23時59分と0時、本当に微妙なところだったから20日生まれにするか21日生まれにするか選んでいいよ、けどお母さんがゆっくり休めるように21日にしようか」とのこと。もちろん時計なんて全く見ていなかった私、誕生するときってそんなものなのかーい！とツッコミをしたい気持ちを抑えながらも21日0時ジャスト生まれに決めました。後々立ち会った夫に聞いてみると、本当に微妙だけど59分だった気もする…と言われましたが。でもこれもまたいい思い出、雄大が大きくなったら話してあげたいと思います。

そんな雄大も6ヶ月になりました。4ヶ月になってすぐ寝返りをするようになり、今は仰向けに寝かせてもすぐ寝返りし、戻れないと泣いて知らせてくれます。2歳離れた兄、嵩大（こうだい）の過剰なスキンシップを受けながらも逞しく元気に育っています。たまに兄のところを蹴飛ばしてやり返してる姿を長女の紗英（さえ）と微笑ましく見ています。

3人の子どもの母となった今、育児は想像していた以上に大変だと気付かされました。それと同時に、自分が生まれ育った小川村で子育てができているのは幸せな事だと改めて実感することもできました。

散歩をしていれば声をかけてくれ成長した姿を喜んでくれる近所の方、一緒に遊んでくれる支援センターのお友だちやママたち。一人で育児をしていると塞ぎ込みがちになりそうですが、ここには温かく迎えてくれる方がいっぱいいます。日々感謝の気持ちと思いやりを忘れずに、子どもたちと共に成長していきたいと思います。

大久保英利さん（花尾）



ここ西山地域は昔から、傾斜地が多いため田畑での作業労力として、堆肥作りのため牛馬を飼育していたそうです。特に堆肥作りには馬の方が効果的だったそうで、圧倒的に馬が多く飼育されていました。また、西山地域の馬は地域内の労力にとどまらず、それぞれの田植えの時期になると労力として、安曇野地域や川中島、富山県にも貸し出していたそうです。そんな「馬喰（ばくろう）」を生業としていた家が小川村でも昭和30年代後半まで何件もあったそうです。当時のことを知る人は今ではほとんどいませんが、父親がその「馬喰」をしていたという大久保英利さんに話を聞くことができました。

英利さんの父親・昇さん（没82歳）は元々実家のあった花尾で百姓をしており、山の木材など運搬する目的で馬を飼っていたそうです。7人兄弟の末っ子だった昇さんは、15歳になる頃には「馬喰」として一家の生計を支えるようになっていたそうです。土木作業1日の稼ぎが２５０円程の時代に「馬喰」は1日５００円程稼ぐことができ高収入が得られたため昇さんは、馬を12～13頭保有し田植えの時期になると馬を貸し出し、昇さんが不在の時はその馬たちを家族で世話をしていたそうです。

当時、若い時から高い収入を得ていた昇さんのことを妬む人もいたそうで、「生意気だ」とか甘い誘惑に誘う人もいたようですが、昇さんはそんな誘惑に一切見向きもしなかったとのこと。また、「馬喰」は現金商売で現金を持っていると信頼され交渉がうまくいったそうです。

英利さんは言います。「同じお金でも使い方上手、取引上手でなきゃいけない。父はそのことに関しては本当に上手な人だった」「馬は財産だった」と。その言葉を裏付けるように「馬喰」で得た稼ぎで最初に小川村でバイクを購入したのが昇さんでした。馬を富山に貸し出す時は、二輪バイクで富山の農家に出向き交渉し、交渉がまとまれば川中島駅から馬を貨物列車に乗せて富山へ運び、約60日間働いて戻ってきたそうで、大きい農家には2、3頭貸したとのこと。かなりこき使われるため馬は痩せて帰ってきたそうですが、馬が自宅の厩舎に戻り後から昇さんが帰ると馬たちはとても喜んだそうです。「人馬一体」という言葉がありますがまさにその通りだったようです。

また、この頃、村内では、馬の爪を守る蹄鉄を作る所や古くなった蹄鉄を焼き直してくれる鍛冶屋、獣医もいたそうです。

昭和30年頃になると、農業の機械化が進み、農業組合が大きくなり、昇さんのような個人の「馬喰」が減少していきました。昇さんも昭和37年に「馬喰」を辞め、「大久保畜産」という名前で新たに牛を飼うことになりました。

牛は、上田や小諸にある家畜市場に持っていきセリにかけたそうです。大久保畜産で飼っていた牛はその当時、乳牛で25、26頭おり、外石の峰を越えて、市場行きのトラックが待つ下市場まで手で牛を引いて行ったそうです。英利さんも幼い頃から牛に接し、藁をやることを手伝うなど大変だったそうですがその時は苦労とも思わなかったそうです。

英利さんは現在60歳。5年前までは父・昇さんの意思を受け継ぎ、兼業で牛を飼い、最後は肥育牛3頭、子牛6頭いたそうです。「馬喰」を辞めた今でも馬や牛のこと、その歴史を話される眼差しは力強く多くのことを教えていただきました。

これからも小川の歴史の1ページとして「馬喰」を語り継いでいただきたいと思います。

明松寺馬事公苑の馬

歴史探索

「農耕馬」

村内の石造物で一番多い「馬頭観音」があることをご存じでしょうか？

集落のお堂や四辻・ムラ境にあり、尾根筋や作業道にひっそり建っているのを目にすることがあります。平成13年に発行した『小川村の石造物文化財』の統計では３４０体を数え石造が溶けて正体不明の調査漏れを含めると４００体ぐらいになるとのこと、なぜ多いのか今回関連を調べてみました。

☆馬の役目

○農耕馬

馬の寿命は約20年。昭和30年代前半まで農家の一員として大切に飼育されていました。農家にとって、農耕、荷役、運搬、農業生産に欠くことのできない堆肥作り、馬の出稼ぎで重要な収入源を担っていたとのことです。馬の飼育に必要な豊富な草地と大小麦、大小豆の産地であり、大小豆の殻は大麦と稲藁と共に、馬の飼料として最適であったとあります。

稲を馬に引かせて運ぶ、昭和37年
（『おがわの百年』より）

馬の１年間の労働

月　日	労　働
1月 ～３月	飼育・休み 堆肥作り
4月 ～５月	出稼ぎ (大町･白馬、富山県)
6/5 ～6/20	自家代掻き
6/20 ～7/10	出稼ぎ （川中島）
7/10 ～10/20	出稼ぎ （大町・白馬）
10/20 ～11/20	自家労働
11/20 ～12月	飼育・休み 堆肥作り

戦前には村内に約３００頭が飼育されていたとあります。馬喰の貸馬制度の話し合いにより、大町・白馬に出稼ぎで、春の代掻き、秋には稲運び等を行い11月十日夜（とうかんや）には労賃や米を背負って帰って来たとあります。大正2年頃から、塩の道を通って富山県へ馬の出稼ぎが始まり、馬喰の口入れで何の保証もなく、馬喰と飼主の信用で4月5月の2か月間馬耕・代掻きをしたとあります。しだいに川中島駅から貨物列車に積まれて

一昼夜かかって運ばれるようになり、お盆には馬喰が労賃を払うが農家の年収三分の一位に当たる多額の収入であったとあります。4月5月の出稼ぎから戻ると自家の代掻きが始まります。自家の作業が終わると川中島平の麦の刈り取りを待ってただちに馬耕・代掻きに入ったとあります。全国でも珍しく時期の遅い田植えになり、6月下旬から7月上旬にかけて作業したとあります。川中島平の田植えが終わって、飼主に帰るとき西山より早い初物のキュウリやアンズの土産物がつきもので、飼主は馬の帰りを楽しみにしていたとあります。

馬の出稼ぎも耕運機の出現で農業の機械化と乳牛導入等で年々減り、昭和30年代後半には見かけることができなくなりました。

○出征馬

江戸時代の松代藩では、貸付飼育の記録があります。合戦、もしくは藩用の折には直ちに農耕馬を出征馬として差し出す仕組みになっていたとあります。

明治以降、明治27・28年の日清戦争、明治37・38年の日露戦争、昭和12年の日中戦争から太平洋戦争の集結まで出征馬として徴発されています。

☆馬の安全を祈り

○馬頭観音（馬の供養塔）

馬の守護神として、農耕・運送などの馬の安全を願い人間と同様に愛馬の冥福を祈って路傍に建立されます。村内に見られるほとんどが馬の供養と結びつき、特定の死馬の供養の目的で人の墓と同じような意味で造立されています。

馬頭観世音が馬と結びついた理由は、馬頭を頭上に戴き魔障や煩悩を馬が大口を開き食い尽くして衆生を救済

馬頭観音設置数

行政区	設置数
夏　和	20
久　木	8
高府町	34
花　尾	27
上　野	38
小根山町	2
立　屋	2
塩　沢	1
上　和	23
稲丘東	53
稲丘西	19
成　就	
北　尾	16
法　地	22
瀬戸川	10
馬　曲	8
川　手	4
川　上	5
桐　山	4
古山東	3
古山西	3
21区	302

する仏教の畜生道からきています。

○記念碑（出征軍馬）

昭和13（1938）年「国家総動員法」が制定され、農家の馬は毎年馬の検査が行われ、軍用保護馬に指定されました。指定された馬は一定の鍛錬が課せられ、徴発されました。飼主が無事に国のお役に立つようにと、建立されました。

○駒爪・駒蹄観音（高戸谷道の途中にある馬頭観音）

戦乱の時代、馬曲城と谷を一つ隔てた古山城が戦を起こした。急峻な谷を馬曲勢の駒を進めることができずに敗れたとか、安曇往来となる険阻な峰道で馬の蹄や脚の安全を祈ったことから特別な観音様を祀り、地元でお祭りを行っています。

☆馬との生活から

○寄棟造茅葺（よせむねづくりかやぶき）と馬屋（まや）

人間の住居と作業場（土間）と馬屋が一緒になった寄棟造りの茅葺の建築。間口が10間（18m）以上あり、建築の半分が住居の茶の間・寝間・客間で、あとの半分は土間で台所・作業場（麻掻き場）と馬屋があります。家族同様一つ屋根の下で暮らしていました。昭和40年代以降、茅葺の葺き替えが減り、茅葺の解体及び、茅葺の上にトタン板を張る農家が増えました。

大町市美麻 重要文化財 旧中村家住宅

○萱場（かやば）（草刈り場）

馬の餌となる草を刈る共有地。春は山菜の「コウミ」「ワラビ」などが採れたが、昭和30年代以降、馬の飼育数が減少と共に、植林が行われました。

○麦と豆

馬を越冬するに、餌となる藁・豆柄が重宝されました。作付けには10月の麦まき、6月の豆まきの輪作の堆肥には馬糞が効果的でした。馬の飼育数の減少により、麦の

作付けが減少しました。

☆馬との関わりがある地名

○中牧

中牧の「マキ」は、牧場のこと。この地区に中牧城址があります。この城主は牧場経営で勢力を得た一族で、長野市信州新町中牧から来て、鬼無里の方へ去ったという伝説があります。

○馬杭（まぐい）（高府信号機周辺）

江戸時代初期に下市場で馬市を開き、馬の手綱を繋いだ杭の場所

○百間谷（ひゃっけんだに）（稲丘東西区境の小池沢の谷）

元の地名は昭和10年代まで「ソマ落とし」と言われていた「馬捨場」です。地名の由来は、公民館主事の祖母が若い時に、夜なべ仕事の糸紬の合間に読んだ小説「千尺の谷」を引用して「百間」に変えて広めたとのことです。味大豆地区入口には、馬頭観音様が祀られています。

（参考資料「小川村史」「縮尺版 館報おがわ」「小川村の石造文化財」「むしくら風土記中倉神社と廣福寺」「図説・北信濃の歴史」）

小川村文化協会 作品展

3／9～3／19

ふるさとらんど小川にて小川村文化協会作品展が開催されました。（ステージ発表はコロナ禍で活動ができなく中止）

※サークル活動のグループ及び会員を募集中!!

小川写友会

書道クラブ

絵手紙教室
山桜の会

小川作陶クラブ

松峯工房

小川短歌会

手芸教室

ぶっくるたんぽぽ
図書室だより
小さな木の実
第112号
図書委員会

こどもの読書週間 4／23～5／12

～読み聞かせボランティアに挑戦～

家庭・地域の読書を推進する「こどもの読書週間」。今年は、図書室でおすすめ本を紹介するだけでなく、図書委員が小学校の読み聞かせボランティアに挑戦しました。図書ボランティアの皆さんと一緒に学年毎の授業時間にお邪魔し、谷川俊太郎の詩「いち」の朗読の後、3～4冊の読み聞かせをしました。児童の顔を想い浮かべながら、時間をかけて丁寧に選ばれた本たち。先生の愛情、子どもたちの楽しそうな顔、真剣に聞いてくれる姿にふれ「本」がもたらす豊かな心の成長に可能性を感じました。

２年生の授業で。太鼓や木琴を演奏しながら絵本「アフリカの音」の読み聞かせをしました。子どもたちも興味深々の様子

図書委員が読んで良かった本、おすすめの本などにポップをつけて紹介

ブックスタート ～生後６ヶ月の赤ちゃんへ本のプレゼント～

山本（やまもと）梨紗（りさ）ちゃん

『だるまさんが』かがくいひろし

高山（たかやま）令衣那（れいな）ちゃん

『くっついた』三浦太郎

本のはなし～小・中学校校長先生に聞きました

小川小学校校長
塩﨑正昭先生

愛読書はコレ

『呼吸入門』齋藤孝 著

長年師事している剣道のお師匠さんから授けられたという一冊。呼吸にまつわるハウツーだけでなく、呼吸と心が密接な関係にあることなど、人生の様々な場面で参考にしたり何度も繰り返し読んでいるそうです。ブックカバーをつけていつも持ち歩くほどの愛読書。

◎小学生におすすめの本

『にげてさがして』ヨシタケシンスケ 著

愛読書はコレ

『身近な「鳥」の生きざま事典～散歩道や通勤・通学路で見られる野鳥の不思議な生態』一日一種 著

小川中学校校長
小林浩一先生

小さい頃から鳥、犬、猫、昆虫と一緒に生活していたという校長先生。今でも動植物が好きでインコを飼ったり、自宅の庭に鳥の巣箱やえさ場を作って部屋の中から「鳥見」をするのが日々の楽しみだとか。「鳥の生態や特徴などがイラストと短い文章でまとめられており、鳥好きの人におすすめ」。

◎中学生におすすめの本

『意味がわかるとゾクゾクする超短編小説 54 字の百物語』氏田雄介 編著

夏の図書イベント「公民館でなつやすみ」(仮)

7月29日(土)10～14時 開催予定

今年の夏のイベントは、絵本の読み聞かせと工作、流しそうめんでなつやすみの一日を一緒に過ごしましょう。午後はフリータイム。ゆっくり読書するもよし、宿題するもよし、時間まで涼んでください。詳細は7月上旬頃、チラシでお知らせする予定です。お楽しみに。

『子どもに読んで聞かせたい本は？』

令和4年7月から
令和4年10月生まれの赤ちゃん

篠原(しのはら) 颯太(そうた)くん

『きんぎょがにげた』
五味太郎

大石(おおいし) 一登(いちと)くん

『このあとどうしちゃおう』
ヨシタケシンスケ

就任のご挨拶

新公民館館長　松本　利光

村民皆様方におかれましては、ますますご清祥の事とお慶び申し上げます。

さて、私儀、4月1日より小川村公民館長に就任をいたしました。もとより若輩者であり、その器ではございませんが、前館長をはじめ先輩の皆様方、関係職員、村民の皆様方のご指導とご鞭撻、ご協力を賜りながら、その任を果たして参りたいと考えておりますので、宜しくお願い申し上げます。

公民館が全国に設置されるようになってから、すでに八十年近く経過し、公民館を取り巻く環境も大きく変化いたしました。また、全国の各地域では、人口減少や少子高齢化、コロナ禍などによって地域の人間関係が希薄化する一方で、情報通信技術などの進歩が著しく、生活環境が大きく変化しています。このような中、活力ある健全な地域社会を将来にわたって維持していくために、住民に一番近い公民館が果たすべき役割や責任はますます大きくなってくるものと思います。

先人の皆様並びに村民の皆様が築き上げて来られた、公民館という素晴らしい財産を今後とも大事に継承していくことが、課せられた責務と感じております。

公民館は、地域で、人づくり・地域づくりのために、「つどう」「まなぶ」「むすぶ」場を提供します。村民の皆様には、これからもお気軽に公民館に足を運んで頂きますようお願い申し上げまして、就任のご挨拶と致します。

退任のご挨拶

前公民館館長　松本　貴秀

日頃は、社会教育活動にご理解、ご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

私こと、令和5年3月31日付を持ちまして小川村公民館長を退任いたしました。

平成27年10月1日就任から七年余の在職中は、村民の皆様をはじめ公民館各委員会、各種団体、公民館利用者の皆様には公私にわたりご指導、ご鞭撻と心温まる思い出を賜り厚く御礼を申し上げます。皆様とのご縁により運にも恵まれて楽しく愛情ある七年間をすごさせていただきました。

公民館では、人と人をつなぐことが大きな役割として各種教室、講座を開催してまいりました。特に「おがわ熟年大学」の熟年パワーに圧倒され笑顔と笑い声があふれた時間は忘れません。また、文化協会ステージ発表・作品展示会は年々参加者が増え素晴らしい小川芸術作品に感動した印象深い活動でした。

こうした中で新型コロナウイルス感染症の三年間は公民館活動が中止となった時に多くの皆様から支援を賜り感謝を申し上げます。

人口減少社会となって、社会環境は大きく変化していますが、公民館は社会教育活動の先兵として常に新たな提案、実行に積極果敢に取り組み役割を果たすことをご期待申し上げます。

最後に、これからは、皆様とともに、広い視野で、より良い地域づくりを目指すとともに地域の一層の発展と、皆様のご健勝とご多幸をご祈念申し上げ退任のご挨拶と致します。

2023年度　社会教育・公民館関係役員

【社会教育委員会】

議　長　花田　隆夫
副議長　塚田　綾子
委　員　田中　千香
委　員　塩﨑　正昭
委　員　小林　浩一

【分館長・主事】

夏　和分館長　松本　剛
〃　主　事　柳澤　史樹
久　木分館長　宮嶋　泰信
〃　主　事　久保田正訓
高府町分館長　大日方利夫
〃　主　事　三水　明
花　尾分館長　宮下　元夫
〃　主　事　西澤　謙
上　野分館長　宮尾　甲一
〃　主　事　青木　秀夫
小根山分館長　鈴木　博幸
〃　主　事　伊藤　雅喜
稲丘東分館長　和田　重孝
〃　主　事　田澤　正信
◎稲丘西分館長　大日方雅夫
〃　主　事　宮尾　和三
成　就分館長　川又　啓一
○　〃　主　事　柴山　直樹
北　尾分館長　松本　武志
〃　主　事　北澤　大樹
法　地分館長　宮下　守
〃　主　事　坂口　次男
瀬戸川分館長　宮下　登
〃　主　事　中村　和正
古馬川分館長　伊藤　繁
〃　主　事　伊藤　正

（◎会長　○副会長）

【スポーツ推進委員会】

委　員　長　小林　雅樹
副委員長　松本　武志
委　員　和田　博之
委　員　伊藤　聖寛
委　員　矢口　早苗
委　員　徳武　美江
委　員　佐野めぐ美

【視聴覚委員会】

委　員　長　川又　啓一
副委員長　和田　優孝
委　員　丸田　勉
委　員　和田　久憲
委　員　大久保雅夫
委　員　川又　康助
委　員　横矢　匠

【図書委員会】

委　員　長　大沢　綾子
副委員長　木村めぐみ
委　員　太田　冴加
委　員　多々良亜紀子

【館報編集委員会】

委　員　長　松本　博充
副委員長　松本　治代
委　員　三水　恵
委　員　岩倉　寛子

シリーズ 路端の小さな命 ④

路端の隅でたたずんでいる動植物や石造物について紹介します。このコーナーに情報を提供されたい方は公民館までご連絡ください。

集団登校するアリ

☆アリの大行列を発見

小学校付近でアリの大行列を見つけました。どこから来ているのかと後をつけてみると、高府郵便局の近くまで続いていました。アリの行列はよく見かけますが、なぜ長い行列を作っているのか、改めて小さなアリの世界について調べてみました。

☆アリの生態とは？

学校付近で行列を作っていたのは、体長2・5ミリほどの「アミメアリ」という種類のアリです。アリとしては珍しく女王アリが存在せず働きアリが卵を産み、みんなで育てます。決まった巣を持たず、石の下や朽ち木などの隙間に一時的な巣を作り、巣が壊れたり近くにエサがなくなってくるとエサを求めて移動します。こういう特徴を持つアリは世界に一万数千種いるアリのうち、なんと二種類のみという実は珍しい種類のアリでした。

☆行列ができる理由

エサを見つけたアリが匂いのある液を出し道しるべをつけ、その匂いを頼りに他のアリ達もエサを運びます。また、アリは微妙な湿度の変化を敏感に察知し、雨から卵を守るために運び出しているんだとか。アリに備わった生き延びるための能力に驚きます。

☆小さなアリの大きな力

進化する中で生き延びるすべを身につけてきたアリ社会は、とても合理的で、優れた共同体社会を作り、助け合って生きていました。小さな村に暮らす私達も村民同士が協力し、助け合って暮らしていくべきだと、改めてアリ社会が教えてくれます。

館報おがわ（231号）　発行者：松本利光　編集者：松本博充　令和５年７月13日発行
小川村公民館／〒381-3302　長野県上水内郡小川村大字高府8695　TEL・FAX：026-269-2077　E-mail：komin@vill.ogawa.nagano.jp